

## 第11回全日本スプリントオリエンテーリング大会

国営木曾三川公園ワイルドネイチャープラザ（愛知県稲沢市祖父江町）

協力：岐阜県オリエンテーリング協会

清水、中田茂、中田啓、徳村、川島、牧ヶ野、山田、鳥羽、橋本



今回の大会の舞台は木曾川左岸の祖父江砂丘である。河川にできた砂丘というのは日本では大変珍しいらしい。普段は、広場でのバーベキューを楽しむ人で賑わうところであり、砂を生かしてのアートイベントが有名である。また、ウインドサーフィンの愛好家に大人気の場所である。

ロケーションとしては申し分ないのだが、オリエンテーリングのトレインとしては単調で見晴らしも良すぎるのが難点である。また、公共交通機関の利用に不便なところであるが今回は、300人を超えるオリエンティアがこの地に集結した。

参加者からは、見晴らしが良すぎる。コースが易しすぎる。パーク0みたいだというような感想も聞かれた。しかし、ヨーロッパのように旧市街で開催なんてことは日本ではまず不可能なので贅沢は言えない。このようなトレインでも選手権にふさわしいコースにするのが運営者の力量ということになるだろう。今回は、中央の広大な砂地に杭とテープで迷路を設定するとか囿コントロールを置くとかの工夫がなされた。コースは易しくても、ランナーにとっては、わずかのロスも許されない厳しいレースとなった。

私は計算センターでSI読み取りを担当していたが、次々とタイムが更新されるたびに興奮してきた。観衆からも記録が紹介されるたびに歓声や拍手が湧い

て大変盛り上がっていた。悪条件を創意工夫で克服し選手権にふさわしいコースを提供したいという山川さんの思いは達成できたと言えるだろう。

また、プロデューサーと優秀なプロのスタッフ





の少人数運営ということで、実行委員長（山川さん）、運営責任者（JOA 平島さん）競技責任者（JOA 広江さん）、計時スタッフ（仁多見さんチーム）、イベントアドバイザー（JOA 高村さん）、コース管理（宮西さん）、受付（山川順子さん）、MC（木全さん）にGOLAと東海中高の生徒さん。

これで、選手権予選、決勝、B 決勝、一般、スプリントリレーと盛りだくさんの内容をこなす。予選、一般の間には迷路のテープを張り替えとコントロールの付け替え。決勝スタートの設置。決勝のスタートリスト作りと計算センターの切り替えと短時間のうちに様々な作業を間違いなく行わなければならない。スプリントの運営とは見かけ以上に大変なものである。

しかし、思わぬところにはほころびも出てくる。例えば、スタートの係員が決められていない（急遽中田さんが勤めことになった。）。電波時計が設置していない。スタートチャイマーの電池が切れる。交換したタイマーとブザーの回数が違う。監視員からの報告はレースが終わらないと届かない・・・等、

中には、予選レースが終わるまで公表してはならないスタートリストが、WEBに公開されてしまい、コースの割り振りが後からスタートするものにわかってしまうというなかなか気づきにくいミスも起こってしまった。

そのため今回の大会では提訴や調査依頼がたくさん出てしまい、裁定委員は大忙しとなった（自分は過去に裁定委員を2回勤めたことがあるが幸い提訴に遭遇したことはない）。そして、JOAから異例の謝罪コメントがホームページで公開されることとなってしまった。

プロデューサーと直属のプロスタッフだけでは、競技のコアな部分は賄えても全てを賄うにはもう少し人数が必要となるであろう。そこをGOLAが支援するという話だったので、GOLAが担当すべきであろう部分については、簡略な





運営マニュアルを作ってスタッフの皆さんには伝えていたので、逐一指示がなくても動いていただけたと感じた。むしろマニュアルになくても進んで動いて

いただいたことは本当にありがたかったし、GOLAの底力を見た感があった。もう少しコアな部分と周辺部の役割の調整を山川さんと詰めておく必要があったのだが悔やまれる。

今回の大会開催にあたっては、当初はGOLA主催という予定であったのだが紆余曲折があって、主催JOA、協力GOLAとなった。ここでは書き尽くせない様々な困難や問題があった。参加者にも全て満足のいく大会となったとは言えない。それでも、私はいろいろな面でこれからの日本のオリエンテーリング界の改革の可能性を感じる。そして、改革につなげて行かねばならないと強く思っている。

公園の管理責任者である伊藤忠さんには、この大会のためにご理解とご支援をいただいた。その伊藤さんが私におっしゃったことが心に残っている。

「オリエンテーリングの人は議論して物事を解決しようとされるんですね。ここを利用するスポーツ団体の中には感情的に怒鳴りあうというところも多いのに・・・。」オリエンティアは紳士的で理性的であると認知されていると思うと本当にうれしかった。

(橋本 八州馬)

